




論文審査結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第157号	氏名	オルホン バンザラガチガル Orkhon Banzragchgarav
論文審査担当者	主査	教授 内田 龍児	
	副査	教授 遠藤 泰之	
	副査	教授 佐々木 健郎	
(論文審査の要旨)			
<p>本論文はモンゴル国薬用植物 <i>Oxytropis lanata</i>, <i>Bergenia crassifolia</i> からの化学成分の単離、構造決定と生物活性、及び日本薬局方生薬「黄耆」の基原である <i>Astragalus mongholicus</i> の薬理作用の解明について述べており、序論の他に3つの章から構成されている。</p>			
<p>第2章では <i>Oxytropis lanata</i> から天然物中での存在が極めて稀な11種類の新規ジフェニルオキサゾールとその誘導体を含む合計17種類の化合物を単離、構造決定し生物活性について述べている。その中で、ジフェニルオキサゾール類の抗トリパノソーマ活性の構造活性相関について検討し、フェニルに配位するヒドロキシルの数及びその位置が活性に大きく影響することを明らかにした。本章の内容は <i>Journal of Natural Products</i> 誌に発表された。</p>			
<p>第3章では <i>Bergenia crassifolia</i> から2種類の新規ジアシル化カテキンとベルゲニンの誘導体を含む合計22種類の化合物を単離、構造決定し生物活性について述べている。その中で、アシル化カテキン類の抗バベシア活性の構造活性相関について検討し、ガロイルの数及びそのカテキンへの結合位置が活性に大きく影響することを明らかにした。</p>			
<p>第4章では日本薬局方生薬「黄耆」の基原である <i>Astragalus mongholicus</i> の薬理作用の解明について述べている。その中で、卵巣β酸化及びエストロゲン依存性子宮増殖抑制作用を誘発する可能性があることを明らかにし、強壯作用及び水滞、冷えによる不妊症治療へ応用されることがある黄耆含有漢方方剤の作用機序の解明に意義ある知見を示した。本章の内容は <i>Molecular Medicine Reports</i> 誌に発表された。</p>			
<p>以上、本論文は生薬学・天然物化学の領域に新しい知見をもたらしており、博士の学位を与えるに相応しいと認めた。</p>			